

## 遊星惑星源流考(1)

Etymological Considerations of "Planet"

井本 進 *Susumu Imoto*

我國の言葉は色々様々な形態で用ひられて居り、其の源流に遡るには、相當複雑多岐な途を歩み、辿り行かねばならぬ。此の、日常使用して居る言語の源を突きとめる努力は、古來、多くの學者乃至好事家により、試みられたのであつた。

日本語は、大觀する處では、我が肇國以來の固有の言語、所謂“大和言葉”と、外來語との二つに分かつことが出来るが、古くは、神代の時代より、大和朝にかけて以來、朝鮮、支那などとの交渉が繁くなるに及んで、所謂、昔からあつた處の、此の“大和言葉”に、漢語、印度語、其他の外來語が混入し、中世の頃から以後は、更に所謂“南蠻語”と呼ばれて居る南方語や、西洋語が渡來して來て、我國の新流行語となつた。即ち、南洋諸國の言葉に加ふるに、和蘭語であるとか、ポルトガル語であるとか、ラテン語などの歐洲語が合流し、更に、又明治時代に入るに及んでは、西洋で出來た新造語とか、新流行語を、其の儘、日本の言葉として採用する様になり、續く大正昭和時代に至つて、之に一層拍車をかけて、新しい日本の言葉が盛に造り出された爲め、甚だ複雑な困惑すべき様相を呈することゝはなつたのである。凡そ何事でもさうであるが、行き着く所まで行つて終つた事態は、必ず何時かは一度は整理され、再發足を仕直す必要ある秋がやつて來るのである。茲に國語統一の問題が起つて來る次第であつて、日常使用して居る言葉は素より、學術語に至るまで、一度は整理統合する必要があることゝなつて來たのである。此の國語統一の問題は、明治33年四月、文部省に“國語調査委員會”が設けられて以來、多年の懸案を討議せられて來たのであるが、未だ解決せられない諸問題が残つて居る。此の國語調査委員會は、大正2年になつて廢止せられたが、其後、大正10年には“臨時國語調査會”が組織せられ、今日に至つてゐる。

然る處、我が天文學界に於ても、夙に本問題が屢々取上げられて居り、山本一清博士などは、其の急先鋒であつたのである。偶々昭和15年末、帝國學士院内の學術研究會議天文學部術語統一委員會が平山清次博士外敷氏により組織せられ、翌16年一月25日附にて、各地天文研究團體に對し、“術語統一の參考資料と仕度し”とて、星座學名表及び學用術語表を送り、其の團體が現在使用して居るものを記入する様との申越があつた。其の2表は、何れも日本語と英語とを對照したもので、星座名89語、學術用語329語を含むものであつた。斯くして、天文用語統一問題は再燃して來た次第である。

然しながら、此の問題は多年に涉つて常用せられて來た用語が多種多様ある點だけを見ても、なかなか解決するのに六ヶ敷いものが多いのであつて、用語を統一せんとせば、先づ其の用語が據つて起つて來た源に遡り探ね、所謂歴史的発展の實相を把握し、夫れに依つて、未來世界の慣用語として、最も適當なるものを選出指定すべきことが肝要であらう。

今、筆者が茲に取扱ふ問題は、たゞ一個のアマチュア的立場より、最も顯著にして、且つ、最も人口に膾炙せる『遊星と惑星』と云ふのを選んで譯であつて之に關しては、上田穰博士及び渡邊敏夫氏の御意見並に助力に俟つところも可成り多い。圖らずも、去る九月21日臺灣へ日蝕觀測の爲め、山本博士に同行する機會を持つた時、臺北で文藝家の二三人とお茶を呑んだ席上此の『遊星と惑星』との問題が話題に上り、山本博士より一度筆にする様、需められたのであつた。豫てより此の問題を取扱つた記事を書いて見度く思つて居たのだが、多忙に妨げられて今日に至つた次第であつた。

×                      ×                      ×                      ×

現在刊行されて居る代表的天文雜誌に東亞天文協會の“天界”と、日本天文學會の“天文月報”とがあるが、天界には“遊星”が採用せられ、天文月報には“惑星”が使用されて居る。筆者は何う云ふ事情から斯うなつたのかは知らないが、兎に角妙な現象であると思ふ。我々が住む地球も、此の遊星惑星の家族の一員である關係上、此の言葉が用ひられる機會は天文用語の中でも殊に多いのであつて、又、一般世間にあつて、日常の會話に上つて來る場合も甚だ多く、此の時に二通りの言葉があつては、困つたものと思ふ。“言葉には表裏二面があるのであるから二種の呼び方が存在してもよいではないか”との議論も成り立つが、これからの子弟達が教へられる場合、困つた問題だと思ふ。筆者は、何れの側にも偏せず、囚はれることなく、思考する時、どうも遊星と呼ぶ方が適當と思ふのである。この事は、先般平山清次博士、神田茂氏などに拜眉の機會にも語つた所であつて、國定教科書にも遊星が採用せられて居る現状である。又、子弟達が文字を學ぶ時“遊ぶ”と云ふ字は、意味もよく判り、覚え易く、又、常によく用ひられる爲め、用語として遊星の方が極めて適當のものと考へられるのである。

結論の方が先きになつて終つたが、以下、遊星と惑星の用語の考證を試みることにしよう。

×                      ×                      ×                      ×

遊星惑星の言葉の歴史を顧みると、此の二つの言葉は、共に左程古くはなく、大體百六七十年度の歴史しか持つて居ないことが判る。そして、歴史としては遊星よりも惑星の方が少し古い様である。惑星が最初に現れた文獻は、安

永三年(1774)長崎の通詞によつて書かれた“星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記”と云ふ寫本であらう。此の中に初めて惑星と云ふ文字が出て居る。筆者收藏の“天文要訣”と云ふ寫本にも惑星と云ふ文字が見えて居るが、此の書物は上の“天地二球用法記”と、大體同じ内容のものであるから、殆ど同一時代のものであらう。それから、少し降つて、文化六年(1809)司馬江漢の著した“刻白爾天文圖解”にも惑星と云ふ文字が載つて居る。

然らば、此の惑星と云ふ文字は如何う云ふ處から出て來たのであらうか？直ぐ頭に浮んで來るのは、火星の別名である“熒惑星”と云ふ文字である。“熒惑”と云ふのは、人心を迷はすと云ふ意味であつて、あの兵術の書である六韜には“妄りに詐誘を張り、以て其の將を熒惑す”と云ふ様なことが載つて居るが、結局、星の位置が一定の法則にあてはまつて居ないで、著しく常軌を逸した行動をするので、熒惑星と云ひ、之から轉じて火星のみならず、西洋の所謂 planet の譯語として“惑星”と云ふ文字を當てることゝなつたものであらう。或ひは、長崎の通詞本木良永の發明であるかも知れない。兎に角、之れ以前は惑星と云ふ言葉は物に見えて居ないのである。

さて、遊星或は惑星のことを、今、英語で planet と書くが、中世の英語では、“planete”と書いたのであつて、之れは希臘語の πλανητ から出たものである。共に彷徨するもの、wanderer と云ふ意味である。獨逸語は矢張り Planet, 佛蘭西語では planète と云ひ、凡て wanderer の意で、語原は同一である。此の意味から云つても惑星と呼ぶよりも“遊星”と呼ぶ方が蓋し適譯である。

遊星と云ふ字が、初めて天文の書物に見えて居るのは明治八年(1875)久島淳徳の譯した“天文初歩”と云ふ書物からであらう。然し“遊ぶ”と云ふ字の代りに“遊ぶ”と云ふ字になつて居る“遊星”と云ふのがある。此の“遊星”の方は大分古く、あの紛炮考を書き、又、火薬の研究に没頭する中不幸にも爆死した尾張の吉雄常三が著したものに“遠西觀象圖說”と云ふ書物があるが、夫れにドワール・スタルの譯語として載つて居る。吉雄常三も長崎の通詞の後裔であることを考へると、惑星の起源と共に、一脈相通する處がある様だ。大游星6箇、小游星11箇とし、大游星を所謂 planet の譯語として居るが、小游星の方は一名“衛星”と書き satellite の譯語に當てゝ居る。此の『遠西觀象圖說』は三冊の板本であつて、文政六年(1823)に刊行されたものである。

猶、 “遊星”と云ふ文字を用ひて居るのに永井士訓の“泰西三才正蒙”と云ふのがある。之は嘉永三年(1850)に刊行された書物で、三冊の板本である。更に、明治の初年に刊行された清原清彦の“窮理智環”にも、亦明治八年に出た永峰秀樹譯の“物理問答”にも、それから明治九年に公けにされた“物理階

梯”と云ふ書など、何れも遊星と云ふ語を採用して居る。

他方、“遊星”の文字を採用して居る天文書を擧げて見ると、前に述べた天文初歩に次では明治十二年に文部省から刊行された“洛氏天文學”明治二十年に出た増山守正の“挿畫天象地球略解”，明治廿四年に書かれた澁江保の“初等教育小天文學”，明治廿六年に出た“普通天文學”などがあるが、明治初年頃は比較的少數の天文書のみが此の遊星なる文字を用ひたに過ぎなかつたのである。それが、俄然明治廿年代を迎へる様になつて漸次優勢となつて來たのであつて、明治卅年には横山又次郎氏の“地球の過去及び未來”，明治卅三年には三澤力太郎氏の“自然界の現象”又、明治卅五年には村上春太郎氏の“天文學一夕話”，明治四十一年には横山又次郎氏の“天文學叢話”などが、相繼いで遊星を採用したのであつた。

之に對して、“惑星”を是として採用して居る天文書も可成り多いのであつて、上記した“刻白爾天文圖解”より後は、暫く跡は絶へたが、明治初年になつて、又再び勢ひを得て來た。即ち、明治四年刊行の金澤學校の“星學初歩”と、神田孟恪譯の“星學圖說”に、明治六年吉良儀風の“天文錦の緒”，明治七年文部省から出た“星學捷徑”，明治十八年に書かれた渡邊龍譚の“佛國眞天談第一編”など、何れも惑星を用ひて居る。そして、明治卅六年、河西璞が著した“天文讀本”，明治三十九年には一戸直藏氏の“高等天文學”が世に出たが、此の二つの天文書は矢張り惑星を採用して居る。平山清次博士の御話では“自分は元々から惑星を用ひて居たのではなく、始めは遊星を用ひて居たが、死んだ一戸直藏氏あたりが惑星の使用を主張して居られた爲、惑星を用ひる様になつた様に記憶して居る”との事であつた。

次いで、明治四十一年には日本天文學會から“天文月報”が刊行されることになつたが、同誌は惑星を使用することにしたのであつた。爾來、東京帝國大學並に東京天文臺系統の人々により書かれた天文書は總て“惑星”を採用して居る。

他方、東亞天文協會の前身天文同好會は山本博士の統率の下に大正九年より雜誌『天界』を刊行したが、同誌は遊星を採用し、今日に至つて居る。これより以前から新城新藏博士、山本一清博士、上田穰博士なども遊星を採用して居られたのであつて、大體京都帝國大學並に東亞天文協會系統の人々は遊星を使用したのである。

猶、天文月報が發刊された明治四十一年と時を同じくして、三宅雄二郎氏は“宇宙”と云ふ書物を公けにしたが、矢張り“遊星”を採用して居るのは、誠に興味深い。(つゞく)